

総会議事録(抜粋)

日 時 昭和31年5月18日午後1時より5時

出席通常会員 97名

委任状総数 213

議長 長 大谷 東平氏

定款第36条により 総会は成立

議 事

1. 昭和30年度事業経過報告(理事会提出)
2. 昭和30年度収支決算書報告(理事会提出)
次頁の表の通り、異議なく承認された。
3. 昭和31年度収支予算案審議(理事会提出)
次頁の表の通り、原案通り可決された。
4. 日本気象学会創立75周年記念事業に関する件(理事会提出)
つぎのように議決された。
 1. 気象学記念論文集を発行する。論文は国内的なもの、国際的なもの、いずれをも含める。なお、

気象学会の歴史は、渡辺和夫会員を中心にまとめつつあり、この歴史を記念として発表する。

2. 創立75周年記念式典を行う。
3. 気象学に関する国際会議の開催について考える
5. 昭和32年度総会開催地に関する件(理事会提出)
従来通り春に総会を名古屋で開催する。なお75周年記念式典は秋に東京で行うことにきまつた。
6. 「天気」の編集に関する件(関西支部提出)
提案理由: 支部会員の論文が掲載できるよう、支部会員の数に応じた頁数を優先的に割りあててもらいたい。学会誌の編集が地域的に偏頗にならぬようにという趣旨である。

提案趣旨については、編集委員においても了解しており、なるべく趣旨に沿うようにしたい。それについて、支部及び各地区に地区編集委員を置き、各地区との連絡を密にするような考えで進めている。

昭和31年度日本気象学会賞受賞者

大気潮汐に関する研究

沢田 龍吉(中央気象台)

大気中の潮汐現象は熱帯地方では顕著であるが、中緯度の地上では移動性擾乱の背後にかくれてしまうから、極めて大きな数の観測を統計して始めてその検出が可能となるのである。しかし、地上に於てのこの様な顕微鏡的現象も大気の上層に於ては高さの増加とともに現象が顕著となり、地磁気現象、電離層現象に関連して極めて重要なものである。

大気潮汐はラプラス以来統計的に、理論的に多くの碩学によって研究されて来た問題であるが、沢田竜吉君はこれらの碩学の業績に続いて、大気潮汐論に更に大きい足蹟を遺したのである。研究は大別すると、2部に分け、第1部は半日太陽潮に関するもので、第2部は半日太陽潮に関するものである。第1部に於ては最近のロケット観測の結果も考慮した20種の気温分布の型を持つ大気模型につき、極めて労力のかかる数値計算を遂行して、月の純引力的起潮力による潮汐の場合地上の極大気圧の起時は、月の子午線通過より0~3時間遅れること、その遅れはオゾン層及び電離層の温度の変化とともに規則的に変化することを明らかにし、チャップマンが統計的に扱った太陽潮による地上気圧振動の季節変化を説明した。さらに半日太陽潮に伴う気圧、風、鉛直気流の高度変化の様子を明らかにした。第2部に於ては引力及び加熱による起潮力が働く場合を取扱い、引力のみでは極大気圧の起時が(月又は)太陽の子午線通過により0~6h遅れることを示し、実際に起る如く半日太陽潮が太陽の子午線通過より早くなる原因は加熱作用であることを述べこれを色々な角度から吟味した。

沢田竜吉君の業績は大気潮汐論に大きい前進を与えるもので、世界の専門家の間にも高く評価されており、同君の存在は我が気象学会の誇であり学会賞を贈って、その顕著な業績をたたえる次第である。

論 文

Atmospheric Lunar Tides. Met. Papers, New York Univ. 2 No. 3 1954.

On the Role of Thermal Excitation in the Atmospheric Tides. Geophys. Mag. 26, No. 4, 1955.

台風の進路予報の研究

佐々木嘉和, 都田 菊郎

台風の進路予報は、日本の気象学上最大問題の一つであるのみならず、日本の国民生活という点からみても極めて重要な問題である。世界中の熱帯低気圧におそわれる国々でも、その進路予報は重大問題であり、アメリカに於ても本年は特別の予算でハリケーンの大規模な研究が開始されるような情勢になっている。台風進路予報の問題は我国に於ては永らく経験的にも、また理論的にも研究されて来ていたものであるが、何れにも不十分な点があった。

近年数値予報の研究は急速に進歩しつつあるが、普通の数値予報の方法は原理的にその俟、台風の場合には通用できないのである。佐々木、都田両君は台風の特殊性を考慮して、渦度方程式より理論的に台風の運動の法則を求めた。これは理論的観点からすれば、従来のものに比べて最も合理的であり、新しい理論の発展への端緒を開いたものといえる。両君は更にこの理論的結果を実用的方法にまで発展させた。両君が合理的根拠に基いた発展性のある技術を導入したことは、極めて高く評価されるべきであろう。この研究は世界に先じた独創的なもので、外国に於ても高く評価されているのである。

よって日本気象学会は佐々木嘉和、都田菊郎両君の独創的業績に対して日本気象学会賞を贈る次第である。

論 文

Y. Sasaki and K. Miyakoda, 1955: Prediction of Typhoon Tracks on the Basis of Numerical Weather Forecasting Method. Proceedings of the Unesco Symposium on Typhoons, 221-233.

Y. Sasaki and K. Miyakoda, 1954: Numerical Forecasting of the Movement of Cyclone, J. M. S. J. 32, 325-335.

Y. Sasaki, 1955: Borotropic Forecasting for the Displacement of Typhoon. J. M. S. J. 33, 1-8.

Y. Sasaki, 1955: A Fundamental Study of the Numerical Prediction based on the Variational Principle. S. J. M. J. 33, 262-275.

昭和30年度収支決算書

収 入		支 出	
会 費	981,356	印刷編集費	1,954,309
雑誌, 図書頒布	1,482,907	気象集誌	(656,249)
天 気	(755,976)	天 気	(780,670)
予報研究ノート	(518,806)	予報研究ノート	(517,390)
物理気象研究ノート	(3,750)	頒布図書購入費	112,780
雑 図 書	(204,375)	発送通信費	180,764
雑 収 入	224,360	会 議 費	66,188
仮 受	1,097	年会, 総会費	(40,000)
前期繰越金	37,990	役員会, 月例会費	(26,180)
		学 会 費	20,000
		事 務 費	322,299
		職 員 給 与	(142,500)
		物品印刷費	(55,950)
		雑 経 費	(123,849)
		仮 払	6,684
		後期繰越金	64,686
合 計	2,727,710		2,727,710
基 本 金	150,000		変化なし

33巻2号~34巻1号, 6号分
2巻3号~3巻3号, 13号分
6巻2号~7巻1号, 7号分

会員徴集費, 税金, 支部経費
を含む

昭和31年度収支予算書

収 入		支 出	
会 費		印刷編集費	2,312,000
A 会 員	1,134,000	気象集誌	(924,000)
(1,080円×1050)		天 気	(804,000)
B 会 員	673,200	気象研究ノート	(584,000)
(2,040円×330)		図書購入費	100,000
特別, 維持会員	480,000	発送通信費	240,000
(1,500円×320)		会 議 費	100,000
雑誌, 図書頒布		大会, 総会費	(50,000)
気象研究ノート	760,000	役 員 会	(40,000)
(800円×950)		例 会	(20,000)
雑 図 書	150,000	学 会 賞	30,000
雑 収 入	150,000	事 務 費	415,000
(助成金, 寄附, 預金利子等)		職 員 給 与	(230,000)
前期繰越金	64,686	物品印刷費	(85,000)
		雑 経 費	(100,000)
		特別事務費	100,000
		予 備 費	50,000
		後期繰越金	64,886
合 計	3,411,886		3,411,886

34巻2号~35巻1号, 6号分
3巻4号~4巻3号, 12号分
7巻2号~8巻1'号, 8号分
“雨量の観測と予報”等

理事会, 用語委員会,
学会賞選衡委員会等

賞金, メタル等

名簿, 定款印刷等を含む
支部経費, 会費徴集費等
75周年記念事業等